

「経験することの大切さ」

愛媛県立大洲高等学校教諭 池田 知 孝

(教育学部福山分校 昭和62年3月卒業)

私は卒業後、生徒数約1,100名の公立高校に勤務し、まだ2年数か月しか経験のない未熟な社会人ですが、この間に感じたもろもろのことについて、後輩諸君に述べさせていたきたいと思います。

私は昔から文章を書くのが苦手で、小学生の頃には400字詰の原稿用紙に作文しなさいと言われると、それに字を埋めることが先決で、内容は二の次だったことを覚えています。

こういった私の性分は近年まで続き、卒業論文に取りかかる際には小学生の頃と同様に、その内容よりも何十枚もの原稿用紙に相当する文章を自分の力で書けるのだろうか、ということが一番の悩みの種でありました。しかし、実際に始めてみると、文章の長短にこだわる暇もなく、研究の目的、方法、結果など指導していただいた先生、先輩から多大な援助を賜りながら、一生懸命に取り組んだところ、なんとか人並みの論文を完成することができました。

この経験はその内容がどうあれ、一冊の論文を自分が完成させたということで、相当な自信を私に与えました。教職に就き初年度には研修の連続で、そのたびにレポートの提出が義務づけられましたが、この頃には以前のように書くことに対する苦手意識はなく、上手ではありませんが、なんとか文章を書ける人間になっていました。卒業論文はその研究内容はもちろんのこと、文章の書き方をも学ぶ良い機会でありました。時間を費やしたことは、やはり無駄にはならないようです。

また、卒業論文も含めて、経験することの大切さを近頃切に感じます。私は職業がら

前で話さなければならない機会が多く、授業、職員朝礼、全校朝礼など黙っていたのでは仕事にならないのが現状です。授業については就職当初には型にはまったことしか話せなかったものの、毎日3、4時間の授業を行うため次第にゆとりがもてるようになり、臨機応変に行えるようになりました。しかし、目上の70名の方を前にした職員朝礼や、高さ120cmほどの朝礼台の上で全校生徒に話をする全校朝礼の緊張感には、この上なく心臓が震えます。性格により緊張しやすい人、そうでない人、話すのが得意な人などいろいろあると思いますが、1,000を越す前で話をするとなると、誰でも多かれ少なかれ緊張し、思いのすべてを表現できないことをいくらか理解していただけたと思います。

大勢の人前で、自分の伝えたいことをより正確に話せるようになるには、できる限り人前に入る経験を増し、表現はよくないのですが、“慣れること”が大切ではないかと思えます。本校の先生でも、朝礼台に上がった経験の少ない方がたまに全校生徒の前へ出ると、それがベテランの先生であっても声が震えていますし、若い先生でも経験豊かな方は、堂々と話をされています。

これからの時代、人前に入る機会がますます増えると思われます。こういったことが苦手な方はなおのこと、機会があればりごみせず、自分に磨きをかける場へ積極的に身を投じてほしいと思います。経験のないことに対しては、とかく不安になるものです。自信をもつためにはより多くの経験が必要である、ということを感じています。